

小池辰雄記念図書室だより

2018, 6. 14 (木) NO. 43 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

各地の読書会

「霊界の星々」の読書会に参加して

川沿教会 高見 純一

吉田松陰の生きざまから学んだことは、松陰は個人的幸福追求のためにはまったく生きていないということだ。松陰は「二十一回猛士の説」を入獄の数日後に書いた。「猛士」とは、真理のための猛然と戦う士（さむらい）の意であると小池先生は記している。

松陰は、歴史の大転換期を洞察し、「尊王攘夷」を真理とした。天皇を第一として、皇国日本を外国の侵略から救わなければいけない。そのためには、今の徳川幕府の鎖国政策は間違っている。敵である外国のことを良く知って帝国主義的西洋諸国は武力を以って撃ち払うべきだ。日本を活かすためにはこれしかない。松陰は30歳で処刑されるが、「二十一回生まれ変わっても私はこの真理の為に粉骨砕身するぞ!」という気魄を先ほどの説に込めた。

水谷先生は、2018年もまた歴史の大転換期だと教えてくださった。松陰の記した和歌にこうある。「万巻の書を読むに非ざるよりは、いづくんぞ兆民（多くの民）の安きを致すを得んや」。松陰は獄において、一年間に500冊あまりの読書をし、30歳に満たないのに膨大な著作を遺している。

水谷先生は、この和歌から「意味ある、価値ある人生を生きよ。国全体のことを考えて言葉を発し、行動せよ。」と言われる。先生は、いまの日本の将来を憂えておられる。「時代は変わる。今何をしなければいけないのか？自分の置かれた時代をよく見たら、命をかけてしなければならぬ仕事がある!」と。松陰と同じく粉骨砕身の猛士の魂で熱く語ってくださった。それにも拘わらず「一週間の疲れが・・・。」と言いつつ、席上でウトウトと居眠りする私。

先生申し訳ありません！ 私は先生のように愛し合う神の国をサタンの侵略から救うために戦うキリストのための猛士になりたいです。そのためには、まだまだ戦う訓練が必要のようです。先生、情けない弟子ですが、ご指導をよろしくお願い致します！



小池辰雄著 「霊界の星々」

小池辰雄を読む会

●余市「無の神学」

2018年7月8日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌「霊界の星々」

2018年6月2日(土) 13:30~15:00

2018年7月7日(土) 13:30~15:00

(札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家)

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(三ツ木)

●関西「無者キリスト」

2018年度中の読書会はございません。

神戸市中央区磯上通り4-1-12 神戸パイルハウス

*自由献金

*連絡先:090-4645-7389(後地)

●都賀「聖書の人ルター」

2018年6月23日(土) 10:00~12:00

2018年7月21日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プラザ5階

*会費:自由献金

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。
図書室だよりは偶数月発行です。

人生の目的は神讚美

「小池辰雄先生の書かれた『ドイツ語固有名詞小辞典』は今でも手に入りますか？」

と、先だって、北海道にお住まいの方から当図書室に、お問い合わせがあった。

「アマゾンの古本ですと、定価1円になっています。送料が300円近くかかりますけど、申し込めばすぐに送ってくれますよ」とお返事した。

この「ドイツ語小辞典」は1年ほど前に、この欄で紹介した小池辰雄の「仕事」(1964年、研究社から刊行、定価500円)の一つだが、こんな小さな記事を読んでくださったこと、また憶えていてくださったその方に感謝した。

おそらく25歳ごろからだと思うが、92歳に往生するまでの67年間、たくさんの「仕事」をよくも休まずに続けた辰雄だったと思う。学校の教師という仕事(50年間)はもちろんのこと、36歳からは、日曜日ごとの家庭集会(自宅の一部を使つての聖書講筵集会=はじめのころは「武蔵野幕屋」→のち「キリスト召団」、夏と秋には関西や信州その他で「福音特別集会」(2泊3日の合宿)、これらは56年間続けた。学校の春休み、夏休み、冬休みと、まとまった時間があれば伝道旅行で日本中を回っていたし、その間隙を縫つての執筆活動(深夜が多く)があり、幕屋・召団の機関誌を(『曠野の愛』→『ハレルヤ』→『エンクリスト』→『曠愛新書』と形を変えた)発行し、『小池辰雄著作集 全十巻』も著作刊行会を作り、12年を費やして刊行した。人生の最後を締めくくる詩人としての「仕事」だけは残ってしまい、これは未完成のまま天にのぼってしまった。

「人生の目的は神讚美である」と、辰雄は定年を過ぎたころからしばしば言うようになり、自分が行き着く、この世での終点では詩作であると絞り込んでいたように思う。

「私でなければできない仕事がいま一つ残っておりまして、それを終わらせるまでは時間が足りないのです、大概のことは今後ご無礼しなければなりません」などと、90歳ぐらいからは、本気で欠礼の挨拶と年賀状など出していたように記憶する。

私が辰雄のそばで暮らした年月は、ちょうど彼が東京大学を定年退職した1964年から後の32年間だが、我々長男家族の子育て真っ盛りの時期には、おばあちゃんと一緒に「おじいちゃん」も日々

何かにつけて関わり助けてくださった。共働きをしていた私に代わり、保育園のお迎えはおじいちゃん、お風呂もおじいちゃん、晩御飯はおばあちゃん、時には添い寝までしてもらって安心だった。夏休みともなれば孫たちを引き連れて「特急あさま」に乗り、信州の山小屋でのどかな生活。ここで執筆の時間を確保しながらも、田んぼにホテルを見に連れて行ってくれるなど、親の代理を難なくこなしてくれた。

「幼子のようにならなければ、神の国に入ることにはできない」とのイエス様の言葉通りに、幼い孫の姿が天国の慰めであったかと思う。

あと2年あれば完成していたかもしれない辰雄の傑作(と本人が言う)「詩篇」は、『霊界の星々神の幕屋人物列伝』という新しい虹の衣を着せられて、辰雄往生の2年後の1998年8月29日(辰雄の命日)に、彼が興した曠野の愛社から出版した。

『天来のみ霊よわれを貫きて 一大叙事詩を世に投げしめよ』 辰雄

(1962年、西独ハンブルク大学に日本学交換教授として渡独中、長編詩執筆の大望を和歌にした辰雄。『霊界の星々』の編集後記 沢田正信より)

1971年夏 野尻にて

